京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

# News Letter

## Graduate School of Education


❷巻頭言　鈴木晶子　副研究科長

❸名誉教授から　川崎良孝
前平泰志

❸研究ノート
教員から　MANALO, Emmanuel　教育認知心理学講座 教授
院生から　松山 才一　教育行政学講座 修士課程2年
社会人院生から　木下 浩一　生涯教育学講座 修士課程1年
留学生から　李　晶晶　教育方法学講座 修士課程1年

❻活動報告
附属臨床教育実践研究センターから
岡野 憲一郎 センター長
教育実践コラボレーション・センターから
西平　直　臨床教育学講座　教授

❼事務室から　田中孝二　事務長
辻　幸代　教務掛長

❽若手研究者出版助成事業

❿諸記録
1. おもな出来事(2014.11.1～2015.4.30)
2. 入試結果(H27年度)
3. 学位授与件数(H26年度)
4. 教育職員免許状取得状況(H26年度)
5. 外部資金受入れ(H27年度)
6. 人事異動(H26.12.1-H27.6.15)
7. 科学研究費補助金(H27年度)
8. ハラスメント防止に関する研修会

⓮諸報
新任教員・事務職員紹介



No.30
2015.6

巻頭言

# インクルージョン ー 教育の未来形？

副研究科長 鈴木 晶子

今年の3月、久しぶりに第二の母校であるドイツ・ケルン大学を訪れる機会に恵まれた。1388年に創設されたケルン大学は長い歴史をもつ。現在はノルトライン・ウェストファーレン州の州立大学として、5万人の学生と、5500人の教職員を擁する総合大学である。教育学分野は、人間科学学部(Humanwissenschaftliche Fakultät)に属している。私が学んだ1980年代には、伝統的な哲学部教育学専攻のほかに、教員養成を目的とする教育科学学部があった。2007年、教育学関連分野の再編とともに、人間の生をトータルに捉え探究するヒューマンサイエンスを核とした諸分野が集まり一つの学部となった。学部は、A.教育科学・社会科学専門集団(I.教育哲学・人類学・生涯教育学、II.比較教育学・社会科学、III.一般教授学・学校研究)、B.芸術学・音楽学・テキスタイル専門集団(I.芸術・芸術理論、II.音楽教育学、III.ヨーロッパ音楽民俗学)、C.治療教育学・リハビリテーション学科、D.心理学科そして教員養成課程を有している。広い領域にまたがる学部への改組後、学生数は増加の一歩をたどっており、現在は7500人がここで学んでいるという。

今回はケルン大学と共同で、教育的タクトの観点から教師のキャリア形成に関する比較検討を行うプロジェクトの一環で、ケルン市にあるホールヴァイデ総合学校(Gesamtschule Holweide)に調査に入った。ドイツでは小学校4年修了時に、基幹学校(卒後に就職し職業訓練を受ける者が主として進む5年制)、実科学校(卒後に職業教育学校に進む者や中級職につく者が主として進む6年制)、ギムナジウム(大学進学希望者が主として進む9年制)の三種の進学コースに分かれる。早期の進路決定により柔軟なキャリア形成への道を閉ざしてしまう危険があるという批判から、三種の学校形態をまとめた総合学校も一部導入されている。1975年創設のこの学校では、モデル校として社会のニーズに応えるなかで、あらゆる生徒に開かれた学校へと次第に「総合」の概念を拡充させ、外国人居住者の子どもや発達障害など特別な支援を必要とする子どもを積極的に受け入れてきた。初等・中等教育段階しかも職業科や大学進学コースも擁する学校で、生徒数は2500名。職業科の教師や臨床心理士、ソーシャルワーカーを含め教員は200名を数える。目下の課題は、様々な背景をもつ子どもたちが同じ教室で学ぶ「統合教育・インクルーシブ教育」の徹底化である。統合教育は、1994年のサラマンカ宣言を機に、欧州でも人権尊重、教育の機会均等の徹底を具現化する教育の未来像として推進されてきた。ホールヴァイデ総合学校は、今や統合教育の先進校として注目され、国内外からの視察が後を絶たない。クラス編成(26人から31人規模)、カリキュラム編成、小集団学習の導入はもとより、特別支援教育を専門とする教師を全クラスに配置し、授業は2人体制で行っている。

折しも滞在中の2015年3月にドイツ大学学長会議(Hochschulrektorenkonferenz)と文部大臣会議(Kultusministerkonferenz、16ある州の文部大臣により構成)が連名で、インクルーシブ教育実現に向けた教員養成の再編を求める声明を発表した。様々な背景をもつ子どもたち全てに教育の機会を用意するには、多様なニーズに応え得る学校が必要となる。発達障害への対応も含め、教師一人ひとりの資質向上のみならず、医療や福祉の専門家とチームを組み、きめ細かい支援をするような組織力の開発も重要だ。声明は、インクルージョンを軸にした教員養成を大学教育に求めるだけで終わってはいない。同質あるいは同程度の能力や才能をもつ生徒たちに画一的な教育をすることで教育効果や効率性が上がるといった発想を基盤にしてきた従来の教育モデルに対して、多種多様な資質からなる生徒集団のなかでの新たな学びへの転換や一人ひとりの状況に応じた個別の支援方法の開発も求めている。その意味で、インクルージョンは、教員養成の制度面での改革のみならず、チーム学習をはじめとする学習形態や方法、集注や共感など認知、感情、身体を統合した学習、経験を介した学習、記憶と忘却など、教育の基礎研究に関わるパラダイムシフトの必要を促すメッセージを含んでいる。前掲ケルン大学人間科学部では、インクルーシブ教育を教育の基礎研究の根幹にも関わる主題として受け止め、理論と実践の新たな連携システムの一環として、ドイツでは初となる大学付属学校を設置することを決め、この秋には開校の予定と聞いている。

# 名誉教授から

川崎 良孝

## 毎日が日曜日！さて？

阪神淡路大震災のあった1995年の4月に名古屋の椙山女学園大学短期大学部から赴任し、約20年間、京大に勤めさせていただいた。アメリカの公立図書館の歴史と現状について研究しているので、研究論文を執筆する原資料という点では、京大でありがたいと思うことはなかった。しかし2次文献という点では、やはり京大の図書館は歴史的な蓄積があり、大いに助けられた。最も大きな変化は、研究者の養成に関われたことで、これは私にとって大きな刺激となった。ただ最近の院生は優等生タイプが多く物足りない。

印象に残っていることを2つだけ記せば、たまたま3年間、研究科長・学部長をさせていただいて、各先生方と公私ともに親しくなり、これは大きな財産となった。さらに外国の研究者や研究機関と接触するとき、あらためて京大という看板が大きな意味を持つことを実感させられた。

京大に在職中、難題がふりかかること（例えば、研究科の施設の再配置の問題など）はいくつかあったが、もともとが楽観的な性格なのか、ほとんどストレスを感じなかった。しかし退職後、4月に入ってフリーになると、精神的に解放され、あらためて在職中はストレスがけっこうかかっていたのだと思っている。

私事で恐縮だが、家族全員がこの4月1日から新しい生活を迎える。母は有料老人ホームから高齢者向き施設に転居、私と妻は大学を退職、娘は就職ということで、2月から4月にかけては、4か所の整理や引っ越しでたいへんだった。家族全員が新しい出発で、これまでの職（大学勤め）や役職（学会の理事長など）をすべて辞めて、新たに出直すことにした。在職中は毎日が日曜日という状態を夢見ていたが、現実となると、うまく有意義に使いこなせるかどうか、いまだ白紙の状態である。

前平 泰志

## 私にとっての「隠れたカリキュラム」

京大在職中は大変お世話になりました。20数年も教育と研究を務められたことに大変感謝しています。

私が研究科長(学部長)を務めていた時は、入試改革や組織改革のまっただ中で、当時の執行部の人たちとはよく意見のやり取りをした覚えがあります。

研究科長当時の最後の大きな全学の仕事は、総長選考会議委員でした。これは、私を含め学内から選出された全学で5人の委員と学外選出の5人の委員からなる委員会で、毎回の会議は熾烈を極めるものでした。引き受けた当初は、おそらく学内委員はみな選挙管理委員程度の軽い認識で引き受けたものと思われますが、そんな生易しいものでなく、実際、胃が痛くなった委員がおられたようです。この会議は、単なる大学の総長をだれに託すかという問題ではなく、日本の大学がグローバル化の志向を強める時代にあって、改めて本学の果たすべき役割は何かを考えさせる重要な出来事だったと思います。

在職中の私個人は、グローバル化に背をそむけるようなことばかりしていた感が強いです。2006年から協定を結んで活動を続けた京都南山城村の野殿・童仙房地区でのフィールドの実践活動は、ローカル化の極致ともいうべき実践でした。京都大学が生き延びて今後ますます発展していくためには、グローバル化かローカル化かという二者択一の問題でないことは明らかですが、そのことがよく分かっているからこそ、10年近くもローカルに特化し

研究科会議　昼食(送別)会

# 研究ノート

教員から

## Language Skills and Critical Thinking

教育認知心理学講座
教授
MANALO, Emmanuel

There is a popular myth in many Western countries that Asian people – including Japanese people – are poorer at critical thinking compared to Western people. Those who believe this myth provide various reasons that include the structure of Asian languages (which they say can be somewhat limiting for critical thinking use) and that many Asian cultures do not encourage critical thought. As far as I know, there is no robust evidence to support the belief and those reasons.

In reality, Asian people are just as capable of critical thinking as Western people. Our own published research findings indicate this. For example, we found no difference in reported critical thinking use between Japanese students and New Zealand (Western) students. Also, when we interviewed university students in Japan and in New Zealand, we found that their views about "good thinking skills", including critical thinking, were very similar.

So, why does the myth exist about Asian people being poorer in critical thinking? The most likely reason is to do with language proficiency – in other words, how good a person is in using a language. Most studies that have reported differences between Asian and Western students' critical thinking performance had been undertaken in Western universities, like in the US or Australia. The Asian students in those studies were usually international or new immigrant students, for whom English was a second language. And in those studies, the critical thinking task had to be done in the English language, which the Asian students were not as proficient in compared to their native English speaker classmates. A number of other studies have shown that when a person has to use a second language to undertake a task, they usually do not perform that task very well. The reason is that using the second language (in which they are not as proficient) uses up a lot of brain resources. Therefore, little or no brain resources remain for doing the task itself, such as thinking critically about something.

In our own research, we have found that Japanese students perform critical thinking tasks much better in Japanese compared to English. More recently, we have also found evidence that language proficiency – in both Japanese and English – is related to students' critical thinking performance. In other words, the better students are in using a language, the better they are in showing critical thinking in the work they produce in that language. So, this suggests that language skills are really important for critical thinking.

院生から

## 高大接続への関心

教育行政学講座
修士課程2年
松山 才一

私は一年間の浪人生活を経て本学教育学部に入学しましたが、浪人生活の間、そして合格後もある疑問を漠然と抱いていました。つまり、「受験生に極めて『熾烈』な選抜競争を課す現状のシステムには、問題があるのではないか」という疑問です。それについて自分なりの答えを見つけたいと思い、学部3回生次から教育行政学のゼミに参加しました。卒業論文では大学入試において幅広い能力を評価する意義を考察し、さらに自分の関心と向き合うべく大学院へ進学しました。今は「大学入試制度」の周辺にある要素にも目を向け、より幅広い「高大接続」というテーマを扱っています。学部生の時分は先生と先輩方に心配をおかけし、院生となってからも多大なお力添えをいただいていますが、お陰様で充実した院生生活を送っております。

教育行政学研究室の大学院生は私を含め、教育行政組織や政策形成に関する研究を進めています。新聞などでも様々な教育政策が取り上げられますが、"その実施に際してどんな議論を経たのか" "誰のどのような思惑が影響を及ぼしたのか"、細かい部分までは読み取れません。一つの手段として、関係機関の答申・提言・議事録に目を向けることができます。その際、各々の団体に「現場」「経済」「政治」といった属性がある点に注意しなければなりません。このように分析を行うと、「科学技術」「文化」「教育・経済のグローバル化」「少子高齢化」といった多様な課題意識が政策決定に影響を与える力学が見えてきます。文部科学省の施策はそれらを統合・調整した一つの解として捉えることができるのです。

最近では、大学入試センター試験のあり方が見直され、それに並行して各大学における個別試験の方向性についても盛んに議論が行われており、私が経験した「受験」もその姿を変えていくようです。微力ではありますが、そうした議論に少しでも貢献できるよう、今後も研究を進めていきたいと思います。

社会人院生から

## 教育学研究科で探究する「テレビ的教養」の可能性

生涯教育学講座
修士課程1年
木下 浩一

私は25年前、大阪の朝日放送に入社しました。入社して10年は映像エンジニアを務め、その後11年は番組プロデューサー・ディレクターとしてバラエティーやグルメ・クイズ番組などを制作しました。3年前に退社し、現在は映像制作の傍ら講師等をしております。

近年、社会状況とりわけ経済状況が悪化し、新聞・テレビ・出版など、あらゆるメディア産業が苦しんでいます。要因を端的にいえば、「グローバリズム」と「インターネット」ということになるでしょう。前者は政治的・経済的・文化的影響をメディア企業に直接・間接に与え、後者は距離や時間を無化しつつあります。メディア産業における組織や働き方、そしてコンテンツやビジネスモデルは変化を迫られ、徐々に変容しています。

そのような状況のなか、メディアにおける公共性とは何なのか。なかでも「テレビ的教養」の可能性はどのようなものなのか。それらのヒントがメディアの歴史のなかにあるのではないかと考え、佐藤卓己先生の研究室の門を叩きました。

入学して数週間経ちましたが、やはり京都大学は最高の学び舎でした。言わずもがなではありますが、先生と生徒双方のレベルが高い。双方のレベルが高いので、先生が講義やゼミのレベルを高く設定されます。

もうひとつ、京都大学の魅力に「豊富な蔵書」があげられます。京大内に図書設備は50ほどあるそうですが、実際に検索・利用するとその充実ぶりに驚きます。図書環境の整備には、教育学研究科の図書館情報学の知見も活かされています。

「三種の神器」ともいえる先生・生徒・文献が揃っているならば、研究において必要なのは、あとは個人の「やる気」だけでしょう。私は研究者養成コースでの入学ですが、これからの5年間タイムマネージメントを怠らず、精一杯「知的な汗」をかこうと思います。

留学生から

## 「方法」との出会い

教育方法学講座
修士課程1年
李 晶晶

昨年10月に来日して以来、院入試論文と入試試験に追い込まれる研究生生活でした。半年間の努力が恵まれ、今年4月、正式に修士として京都大学へ入学することができました。研究室唯一の留学生、そして女の子として、先輩方にもとても新切に接していただいており、私の楽しい留学生活は今に始まったばかりです。

私は中国遼寧省に生まれ、5歳の頃家族と一緒に日本の長野県へ引越しました。6年間自然に囲まれた環境の中自由自在な子ども時代を過ごすことができました。上海大学在学中、対外漢語という中国語教育の専攻を機会に、よく日本人留学生と交流をしていました。交流する中、日本人留学生の環境保護に対する意識の高さに感心しました。一方、中国での深刻な環境問題にてらし、中国人の環境保護に対する意識は非常に低いものです。私はこのような意識の違いは短期間で生じたものではないと思い、日中両国の環境教育に影響される可能性があると思い始め、日本における環境教育を知るため、日本への留学を決意しました。

修士論文題目提出について西岡加名恵先生とご相談の際、日本の環境教育は公害教育から始まったことを知りました。それをきっかけに日本の公害教育に焦点をあてて研究を進めています。戦後日本では高度経済成長による工業開発にともない、自然環境の汚染、または人の健康の障害という、深刻な公害問題が存在していました。地域の人々は公害反対運動を展開し、そのなかには公害の中に生きる市民の苦しみを知った教師たちも積極的に参加していきました。これが日本における公害教育の始まりです。公害教育には日本人の環境についての独自的思想が含まれており、とても価値ある研究テーマだと思います。中国の顕著する公害問題について、少しでも貢献できるような成果を出せるようこれから熱心に研究に励みたいです。

# 活動報告

## 附属臨床教育実践研究センターから

## 平成27年度の活動予定

臨床心理実践学講座教授 臨床教育実践研究センター長　岡野 憲一郎

平成27年度より当センター長を拝命いたしました岡野です。どうぞよろしくお願いいたします。当センターは、一般市民に開かれた心理臨床実践としての心理教育相談室(室長桑原知子教授)での地道な日々の臨床活動をその主たる業務としています。また学校現場に密着したテーマを現場に還元することを目指し、教師、臨床心理士、精神科医等が交流し思索を深める「リカレント教育講座」、一般市民への教育的啓発を目的とする外国人客員教授による「公開講座」、学校現場での実践を心理・教育的に検討する「現場実践ケースカンファレンス」、東日本大震災被災者に向けた「こころの支援室」の活動、センター関連の研究成果を収めた「京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊等、教育ー実践-研究活動を進めています。

今年のリカレント教育講座(第19回)は8月2日(日)に開催が予定され、「『心の教育』を考える―いじめへの対応と心のケアー」をテーマとして現在準備を進めています。このプログラムは、昨年の8月に予定されていたものの台風で中止となったリカレント教育講座のテーマを事実上引き継いでいます。また公開講座は今年の4月29日(水)にすでに行われ、米国からジョーゼフ・キャンブレイ客員教授をお迎えして「複雑系科学からみたこころ」を開催し、好評を博しました。

また東日本大震災被災者への支援を実践しているこころの支援室では、教員、学生が協働し積極的な支援活動を行っています。さらに臨床教育実践研究紀要は第18巻が本年3月に刊行され、東日本大震災関連の特集が組まれ、充実した内容となりました。皆様のこれまでの暖かいご支援に感謝いたしますとともに、これからも御支援賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 教育実践コラボレーション・センターから

## 動物たちの一番得意な動き－旭山動物園の調査から

臨床教育学講座 教授　西平　直

「動物たちが一番得意な動きを発揮できる空間」。この動物園はその工夫に満ちている。例えば、アザラシ。地上では寝てばかりいる彼らが水の中ではまったく「別人」になる。上下に泳ぐ動きなど驚くほど俊敏。その見事な動きを見てもらえる空間配置を工夫する。

オランウータンのためにはロープを張る。しかも子どものオランウータンが落ちたら死んでしまう高さ(17m)。危険ではないか、そう危険なのだが、危険だからこそ彼らは本気になる。危険が無かったら彼らは本気の能力を発揮しない。危険だからこそ本気で子どもたちを守ろうとする。「ギリギリをねらう」というのである。

坂東園長の話は私たちを強く惹きつけた。動物たちが人間(観客)を不愉快と感じなくてすむ工夫の話も面白かった。動物たちは上から見下ろされるのを好まない。そこで人間(客)が彼らを見上げる空間配置にした。動物たちは観客を見下ろしているから(自分が優位にいると感じるから)ストレスにならない。「動物たちが楽しんで人間を見ていることのできる環境」というのである。

ところが、実は動物たちにとって、人間(客)は楽しみでもある。客が予期せぬ動きをすると動物たちは喜ぶ。客の反応が動物たちにとっては楽しみになる。坂東園長によると動物たちの根柢には「存在を認めてほしい」という思いがある。だから「無視された」と感じると元気をなくしてしまう。人間たちが楽しんで動物たちを見ていれば、動物たちも元気になる。その動物たちの元気な姿を見て観客が喜び、その観客の喜ぶ姿を見て動物たちがますます喜ぶ。そうした相乗性を可能にする工夫。動物たちが一番得意な動きを発揮できる空間。

コラボもそんなことを考えている。私たちが一番得意な動きを発揮できる空間。

# 事務組織の体制変更について

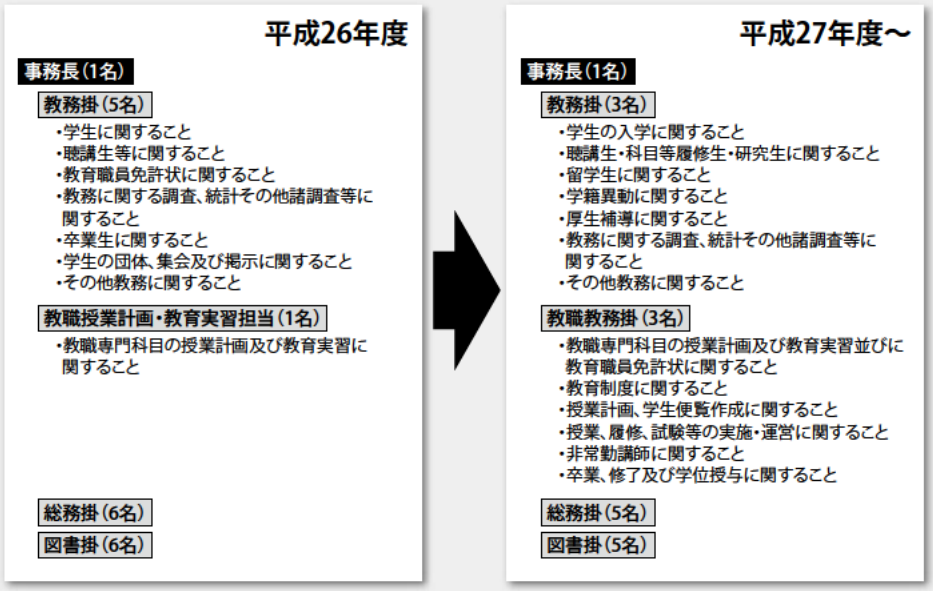
事務長　田中 孝二

平成25年度に行われた事務改革により総務・会計・図書業務については、共通事務部化による事務の効率化・集約化が進められています。

一方、近年の急速な教育改革のあおりを受けた教務事務についても、事務職員1人当たりの業務量が増加の一途をたどり、人材育成機能の低下や事務処理の質・効率性の低下が見受けられました。

このことから、平成27年度より教職教務掛を新設し、既存の教務掛と教職授業・教育実習担当との重複業務を整理すると共に業務分担の平準化を図り、効率的な業務遂行組織体制を構築することといたしました。業務分担については、まずはこの1年、実務を動かしながら調整してまいります。今後ともご理解・ご支援をたまわりますようお願いいたします。

教育学研究科事務部移行図と業務分掌（変更分のみ）




# 小さな学部の大きな窓口

教務掛長　辻　幸代

小さな教育学部の事務室には大きな窓口があります。

街なかでいえば、駅の売店や宝くじ売り場なみで、どうも人が立ち寄りたくなる大きさのようです。一般には教務掛の窓口といわれていますが、あまりに大きいので外からは事務室全体が展望できます。

その昔は確かシャッターがあって、朝ガラガラと上げて夕方ガラガラと下げてまさに開店と閉店というところでした。最近はロールカーテンがしずしずと上下しているので、いつのまにか開店していてこちらが慌ててしまいます。

国語辞典によると「窓口」は① 官庁・郵便局・銀行・駅などで、外来者に応対し金銭や書類の受け渡しなどの事務を執る所　② 外部との折衝をする役　とあります。

①はやっているような気がします。②は締め切りを過ぎたレポートや書類を提出する学生さんとよく折衝?しているので、これもやっているようです。

事務本部の窓口や図書室はカウンター方式が大半ですが、窓にはやっぱりフレーム枠があってちゃんと口の形になっているほうが、外と内を区別しやすいようです。

外の景色には春夏秋冬があって、春はぴかぴか、夏はのんびり、秋はガヤガヤ、冬はあくせくしている学生さんの様子が見えます。こちらから見えるということは向こうからも見えているということで、窓枠から見れば動物園の観覧なようなものではないかと考えてしまいます。朝9 時～夕方 5 時まで観覧可能なところもよく似ていて（土日やっていないところは似ていません）、さすがに寝そべったりぶらさがったりはしていませんが、大きなあくびをしているな～、退屈そうな顔をしているな～などと思われないか気がかりでふっと背筋が伸びます。いつもは平凡な窓口業務のくり返しで、背筋も伸びたり縮んだりをくり返していますが、卒業式や修了式の日に窓口で学生さんから挨拶をされるとビックリと感激で窓口冥利につきるうれしい一日になります。これからも平凡なことを大切に、ときに感激、たまに反省しながら、すべらない、なめらかな窓の口でありたいと思います。

# 若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。
本制度を利用して昨年度は8件採択されましたので、ご紹介します。

| 氏　名 | 修了年月日・現職 | タ イ ト ル | 出版社 |
|---|---|---|---|
| 奥井　遼 | 教育学研究科博士後期課程　平成26年3月修了<br>日本学術振興会海外特別研究員(ルーアン大学) | 〈わざ〉を生きる身体<br>―人形遣いと稽古の臨床教育学― | (株)ミネルヴァ書房 |
| 古川 雄嗣 | 教育学研究科博士後期課程　平成25年11月修了<br>北海道教育大学旭川校　講師 | 偶然と運命―九鬼周造の倫理学― | (株)ナカニシヤ出版 |
| 春木 奈美子 | 教育学研究科博士後期課程　平成25年9月修了<br>日本学術振興会特別研究員PD | 精神分析における4つのアポリア<br>―他者、女、行為、症状― | (株)創元社 |
| 田中 崇恵 | 教育学研究科博士後期課程　平成25年3月修了<br>東京大学学生相談ネットワーク本部学生相談所　助教 | "異"なるものと出遭う<br>―揺らぎと境界の心理臨床学― | 京大学術出版会 |
| 橋本 京子 | 教育学研究科博士後期課程　平成24年5月修了<br>京都学園大学健康医療学部言語聴覚学科嘱託講師 | ポジティブ志向と幸福感の心理学 | (株)ナカニシヤ出版 |
| 栗田 季佳 | 教育学研究科博士後期課程平成25年3月修了<br>三重大学教育学部特別支援教育講座　講師 | 見えない偏見<br>―心に潜む障害者への偏見を科学する― | 京大学術出版会 |
| 古川 裕之 | 教育学研究科博士後期課程平成26年3月修了<br>京都大学学生総合支援センター　講師 | 心理療法としての風景構成法<br>―その基礎に還る | (株)創元社 |
| 八田 幸恵 | 教育学研究科博士後期課程平成23年9月修了<br>大阪教育大学学校教員養成課程　准教授 | 教室における読みの<br>カリキュラム開発過程に関する研究 | 日本標準 |

## 『〈わざ〉を生きる身体
## ―人形遣いと稽古の臨床教育学―』

**教育学研究科博士後期課程　平成26年3月修了**
**日本学術振興会海外特別研究員(ルーアン大学)**
**奥井　遼**

わざの習得をめぐる教え手と学び手の試行錯誤は、一様に豊かであり、ままならない。学び手がうまく真似できなかったり、教え手自身が混乱したり、擬態語を駆使して動きをたぐり寄せるような、総じて、思索と行為とが絡まり合う現場である。

本書は、淡路島の人形浄瑠璃の一座の、人形遣いたちの稽古と興行の場面における具体的な経験をテキスト化することを目指した「生きられた世界の報告書」(メルロ=ポンティ)である。人形遣いたちは三人で一体の人形を操る。複雑なわざを背景で支える彼らの身体は、地域や一座の来歴を背負いつつ、生き生きと働く。

その働きを記述する試みは、理論化の過程で失われる身体の生々しさを取り戻す企てであり、日常的な教育の場面に埋没している経験の豊かさを掘り起こし、新たに眼差す企てでもある。

## 『偶然と運命
## ―九鬼周造の倫理学―』

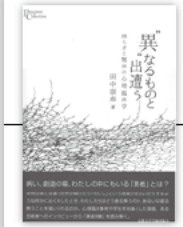
**教育学研究科博士後期課程　平成25年11月修了**
**北海道教育大学旭川校　講師**
**古川 雄嗣**

本書は、九鬼周造(1888-1941)の哲学の全体像を、一度私なりに、出来る限り正確に、捉えてみたいという意図のもとに執筆されました。従って、本書は必ずしも、「教育(学)」のために「役に立つ」研究を初めから意図したわけではありません。私がまず知りたかったのは、九鬼という人は本当のところ何を言いたかったのか、ということです。そしてその結果として、いわば思いがけず、従来の九鬼研究ではほとんど語られることのなかった側面が浮き彫りになって来ました。それが副題に示した「倫理学」としての側面です。偶然を「運命」に変える。九鬼はそういう人間の「生き方」を哲学的に論理化しています。そしてそれは、「生きる意味」の生成と自覚という、すぐれて教育学的な問題でもある、というのが本書の見立てです。

## 『精神分析における4つのアポリア
## ―他者、女、行為、症状―』

教育学研究科博士後期課程　平成25年9月修了
日本学術振興会特別研究員PD
**春木 奈美子**

本書は、「他者」「女」「行為」「症状」という心理臨床から切り出された極めてアクチュアルな問題系に、思想・哲学・文学の手を借りながら、迫ろうとしたものです。主にフランスの精神分析家ジャック・ラカンを参照していますが、先に挙げた問題系に何かしら感じるところのある方すべてを、読み手として歓迎します。分析の素材としては、川端康成、シェークスピア、アンドレ・ジッド、マルグリット・デュラス、ピエール・クロソウスキー等々、誰もが知るあの物語から、あまりメジャーとは言えない(?)作品まで、洋の東西を問わず扱っていますので、目次に気になる作品を見つけたら、まずはその章から読み進めてみてください。その道行きで、普段は出逢うはずのない〈もの〉に遭遇するかもしれません。




## 『"異"なるものと出遭う
## ―揺らぎと境界の心理臨床学―』

教育学研究科博士後期課程　平成25年3月修了
東京大学　学生相談ネットワーク本部学生相談所　助教
**田中 崇恵**

突然大きな病いに罹ったり、災害に見舞われたり――見えている世界が一変し、なんとも意味づけがたい体験が我々に訪れることがある。あるいはそれは、ふとしたひらめきやちょっとしたものの見方の転換など、もっと些細に見える出来事の中にもあるかもしれない。

本書ではそういった体験を「"異"なるものとの出遭い」とし、そこで生じる体験とはいったい何か、それは我々に何をもたらすものなのかということを《病い》《身体》《異界》《創造》《わたし》という5つの視点から迫っている。第1部では3例の心理臨床事例を、第2部では現代芸術家へのインタビューや非臨床群の調査研究を取り上げ、心理臨床にとどまらず我々が生きることにおける"異"なるものとの出遭いとその根幹にある臨床性との関わりについて論じている。

## 『ポジティブ志向と
## 幸福感の心理学』

教育学研究科博士後期課程　平成24年5月修了
京都学園大学健康医療学部言語聴覚学科嘱託講師
**橋本 京子**

このたび，若手研究者出版助成事業の助成をいただき，本書を刊行することができました。本書に収録された研究を遂行してまとめるにあたり，研究科の先生方をはじめとする多くの方々からご支援とご指導を賜りました。深く感謝申し上げます。

ストレス社会と言われる昨今，幸福感の向上は非常に重要な問題となっています。本書はポジティブ志向（現実のポジティブな面を強調するような、必ずしも現実に基礎をおいていない認知）に影響を与える要因は何か，さらにポジティブ志向がストレスフルイベントにおける精神的健康の維持や日常生活における幸福感をどのように向上させるかについて、大学生を対象とした実証的研究に基づいて検討したものです。本書が人々のポジティブ志向や幸福感をさらに高める一助となれば，著者として誠に幸いに思います。

## 『見えない偏見
## ―心に潜む障害者への偏見を科学する―』

教育学研究科博士後期課程平成25年3月修了
三重大学教育学部特別支援教育講座　講師
**栗田 季佳**

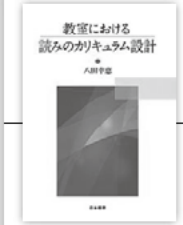
障害者を取り巻く問題は，障害者という対象に限られた問題ではありません。障害者問題には，人間の心のあり方や今の社会が抱える矛盾や葛藤がより現れやすく，私たちの社会の普遍的な問題が映し出されます。本書は障害者に対する私たちのまなざしを通して，差別する人間の心の働きを見つめようとしたものです。

本書は2013年に提出した博士論文をベースにしておりますが，当事者の方や関連領域の方のコラム，差別の現実や差別是正の取り組み・施策の理論的解釈を含めて大幅に改訂しました。現代社会が孕む問題と，その歪みの弊害を最も受ける人たちについて考えるきっかけになれば幸いです。

## 『心理療法としての風景構成法
## ―その基礎に還る』

教育学研究科博士後期課程平成26年3月修了
京都大学学生総合支援センター　講師
**古川 裕之**

精神科医中井久夫によって創案された風景構成法は，精神科医療に限らず心理臨床の様々な現場で用いられている描画法である。本書では，「描画をあくまでコミュニケーションの手段とする」というこの技法の原点とも言える基礎――中井久夫の臨床精神――に立ち返り，大きく2点から，この技法の持つ心理療法としての意義について考察を試みた。1つは，風景構成法を実施する時のやりとりにおいて，どのようなことが生じているか。もう1つは，風景構成法を継続的に実施した際，それらの作品をどのように理解することができるか，である。中井久夫の著述を中心に理論的な検討を加え，さらに調査研究・事例研究を基に考察を行い，特に現代において風景構成法がいかに心理療法として機能しうるのか，その可能性について論じている。




## 『教室における読みの
## カリキュラム開発過程に関する研究』

教育学研究科博士後期課程平成23年9月修了
大阪教育大学学校教員養成課程　准教授
**八田 幸恵**

本書は、高次のレベルの「読みの理解」を保障するカリキュラム設計のあり方に関する研究である。読むことの本来の目的は、テキストを理解することを超えて、テキストを読むことで社会や他者や自分自身を理解することまで含む。したがって、高次の「読みの理解」には、自己認識のような主体的で情意的なニュアンスが強い理解も含まれる。主体的で情意的なニュアンスの強い「読みの理解」を教育目標化し、カリキュラムを通して保障するためにはどうしたらいいのか。この問いを探究すべく、第Ⅰ部では、アメリカにおける読みの教育目標論の到達点を整理して示した。第Ⅱ部は、日本の高校の教室における小説の読みのカリキュラム設計の実践研究であり、授業者と筆者の学習も含み込みながら、本研究のダイナミズムを表現した。

# 諸記録

## おもな出来事(2014.11.1～2015.4.30)

**11月**
1日(土) 京都大学教育学部同窓会
**平成26年度同窓会総会-講演会(脚本家・今井雅子氏)**
(教育学部本館第1会議室)
13日(木) 教育実践コラボレーション・センター主催
**第11回知的コラボの会『日本の心理療法の歴史的形成過程』**
(教育学部本館第1会議室)

**12月** 4日(木)・5日(金) 教育実践コラボレーション・センター主催
**北京師範大学との大学院生交流会**
(教育学部本館第1会議室)
23日(火・祝) 教育実践コラボレーション・センター主催
**E.FORUM教育研究セミナーII**
**「高大におけるカリキュラム改革を考える-探究力育成の視点から-」**
(文学部新館)

**1月**
12日(月・祝) 附属臨床教育実践研究センター主催
**こころの支援室「フィンガーペインティング&和・話・輪の会」**
(総合研究1号館)

**2月**
5日(木) 教育学研究科
**ハラスメント防止に関する研修会 (株)ウイメンズカウンセリング京都・井上摩耶子代表**
(教育学部本館第1会議室)
21日(土) 教育実践コラボレーション・センター主催
**第9回風と雲の広場『されど空の青さを知れり―「ローカルな知と向きあうこと」』 前平泰志教授**
(京都府相楽郡南山城村旧野殿童仙房小学校)

**3月**
9日(月) 教育実践コラボレーション・センター主催
**第12回知的コラボの会『フィールドから生涯学習を考える』**
(教育学部本館第1会議室)
12日(木) **川崎良孝教授最終講義「図書館トリニティの時代から揺らぎ・展開の時代へ」**
(附属図書館 ライブラリー・ホール)
28日(土) 教育実践コラボレーション・センター主催
**2014年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「第10回実践交流会」**
(吉田南総合館東棟)
教育実践コラボレーション・センター主催
**2014年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修**
**『教師力アップ研修「探究力をどう育成するか―」』**
(吉田南総合館東棟)
29日(日) 京都大学教育学部
**特色入試説明会「京都大学教育学部で学びませんか?」**
(吉田南総合館東棟)

**4月**
16日(木) 京都大学教育学部同窓会
**新入生歓迎会**
(カンフォーラ)
29日(水・祝) 附属臨床教育実践研究センター主催
**附属臨床教育実践研究センター 公開講座**
**「複雑系科学からみたこころ―ユング心理学と生態学における複雑性―」Joseph Cambray客員教授**
(京都テルサ)

## 平成27年度入試結果

◎教育学部

| 日程等 | | 募集人員 | 志願者数 | 受験者数 | 合格者数 | 入学者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 前期日程 | 文系 | 50 | 148 | 148 | 52 | 62 |
| | 理系 | 10 | 47 | 47 | 10 | |
| 第3年次編入学 | | 10 | 23(1) | 23(1) | 12(1) | 11(1) |

◎教育学研究科

| 研究担当者 | | | 募集人員 | 志願者数 | 受験者数 | 合格者数 | 入学者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 修士課程 | 研究者養成コース | 教育科学専攻 | 18 | 42(12) | 41(11) | 21(6) | 21(6) |
| | | 臨床教育学専攻 | 14 | 42(2) | 42(2) | 16(1) | 14(0) |
| | 教育科学専攻(専修コース) | | 10 | 27(1) | 27(1) | 11 | 11 |
| | 臨床教育学専攻(第2種) | | 若干名 | 3 | 3 | 1 | 1 |
| 博士後期課程臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース) | | | 4 | 11 | 11 | 4 | 4 |
| 博士後期課程編入学 | | | 若干名 | 8 | 8 | 3 | 3 |

(　)内の数は外国人留学生で内数

## 平成26年度学位授与件数

◎教育学部

| 学位名等 | | 授与者数 |
|---|---|---|
| 学士 | 教育科学科 | 69 |
| 修士 | 教育科学専攻 | 27 |
| | 臨床教育学専攻 | 11 |
| 博士 | 課程博士 | 13 |
| | 論文博士 | 2 |

## 教育職員免許状取得状況

平成26年度(2014)

| | |
|---|---|
| 中学校専修免許状 | 2 |
| 中学校1種免許状 | 5 |
| 高等学校専修免許状 | 4 |
| 高等学校1種免許状 | 8 |
| 特別支援学校1種免許状 | 1 |

## 外部資金受入れ(H27年度)

◎受託研究

| テーマ | 委託者 | 担当者 |
|---|---|---|
| 情動発達評価システムの構築 | 独立行政法人科学技術振興機構 | 明和 政子 |
| 知育玩具ノシリスの触覚・手操作経験が認知機能に与える影響についての実証的検討 | 有限会社　アイ・シー・アイデザイン研究所 | 明和 政子 |
| 行動認知科学に基づく五感複合空間に関する研究 | ダイキン工業株式会社 | 楠見　孝 |

# 諸記録

## 人事異動(H26.12.1-H27.6.15)

平成27年2月1日付け

**Chalandon Emilia**　研究員(心理臨床学)　採用

平成27年1月15日付け

退職

平成27年1月31日付け

**稲川三千代**　教務補佐員(教育方法学)　退職

平成27年2月1日付け

**田中　哲平**　研究員(教育学研究科)　採用

平成27年3月30日付け

**IVESON, Matthew Henry**　外国人共同研究者(外国人特別研究員)　受入

平成27年3月31日付け

| | | |
|---|---|---|
| **川崎　良孝** | 教授(生涯教育学) | 定年退職 |
| **前平　泰志** | 教授(生涯教育学) | 定年退職 |
| **中池　竜一** | 助教(情報関連) | 退職 |
| **髙橋紗也子** | 助教(心理臨床学) | 退職 |
| **中藤　信哉** | 特定助教(附属臨床教育実践研究センター) | 退職 |
| **桐村　豪文** | 特定助教(地域連携教育研究推進ユニット) | 退職 |
| **福山　寛志** | 研究員(教育方法学) | 任期満了 |
| **田邊　亜澄** | 研究員(教育認知心理学) | 任期満了 |
| **趙　卿我** | 研究員(教育方法学) | 任期満了 |

定年退職
任期満了
任期満了

任期満了
任期満了
任期満了
任期満了

平成27年4月1日付け

| | | |
|---|---|---|
| **岡野憲一郎** | 教授 | 附属臨床教育実践研究センター長(任期27.4.1-29.3.31) |
| **明和　政子** | 教授 | 現代教育基礎学系長(任期27.4.1-28.3.31) |
| **桑原　知子** | 教授 | 教育心理学系長(任期27.4.1-28.3.31) |
| **高見　　茂** | 教授 | 相関教育システム論系長(任期27.4.1-28.3.31) |
| **齊藤　　智** | 准教授 | 国際高等教育院へ配置換(大学院教育学研究科併任) |
| **桑原　知子** | 教授 | 国際高等教育院より配置換 |
| **佐藤　卓己** | 教授(生涯教育学) | 昇任 |
| **橋本　敦史** | 助教(情報関連) | 採用 |
| **李　　芝映** | 助教(教育学) | 採用 |
| **ユ　　リラ** | 助教(教育方法学) | 採用 |
| **佐伯恵里奈** | 助教(教育認知心理学) | 採用 |
| **福井　佑介** | 助教(生涯教育学) | 採用 |
| **時岡　良太** | 特定助教(附属臨床教育実践研究センター) | 採用 |
| **柴　　恭史** | 特定助教(地域連携教育研究推進ユニット) | 採用 |
| **田村　徳子** | 特定助教(地域連携教育研究推進ユニット) | 採用 |
| **高橋　紗也子** | 特定研究員 | 採用 |
| **石橋　　遼** | 研究員(教育認知心理学) | 採用 |

**BUTLER, David**　外国人共同研究者(外国人特別研究員)　受入

人間・環境学研究科教務掛長より配置換
教務掛より配置換
教務掛より配置換
教務掛より配置換
採用
採用
採用

平成27年4月12日付け

**SOEMER, Alexsander**　外国人共同研究者(外国人特別研究員)　終了

平成27年4月16日付け

**唐牛　祐輔**　研究員(教育認知心理学)　採用

平成27年5月1日付け

**中山　真孝**　研究員(教育認知心理学)　採用

採用

平成27年5月31日付け

任期満了

平成27年6月1日付け

採用

## 科学研究費補助金（H27年度）

| 事業名 | 研究課題名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 新学術領域研究(研究領域提案型) | 周産期からの身体感覚と社会的認知の発達的関連性の解明に基づく障害理解 | 明和 政子 |
| 新学術領域研究(研究領域提案型) | 思春期における自己制御の発達と学校・社会適応との関連に関する行動遺伝学的研究 | 高橋 雄介 |
| 新学術領域研究(研究領域提案型) | 物語における時間情報に基づく視点取得メカニズム | 米田 英継 |
| 基盤研究(A) 一般 | 学校を中心とする教育空間における力動的秩序形成をめぐる多次元的研究 | 桑原 知子 |
| 基盤研究(A) 一般 | ２１世紀市民のための高次リテラシーと批判的思考力のアセスメントと育成 | 楠見 孝 |
| 基盤研究(A) 一般 | Understanding, measuring, and promoting crucial 21st century skills: Global communication, deep learning, and critical thinking competencies | Manalo Emmanuel |
| 基盤研究(B) 一般 | 「メディア出身議員」調査による新しいメディア政治史の構想 | 佐藤 卓己 |
| 基盤研究(B) 一般 | 東アジアにおける教育過剰と就業行動・意識との関係に関する比較研究 | 岩井 八郎 |
| 基盤研究(B) 一般 | パフォーマンス評価を活かした教師の力量向上プログラムの開発 | 西岡 加名恵 |
| 基盤研究(B) 一般 | 「新しい公共」枠組み下のソーシャル・ファイナンスを通じた教育資源調達手法の研究 | 高見 茂 |
| 基盤研究(B) 一般 | 日英の女性医療専門職の生涯キャリアと養成・支援に関する総合的研究 | 渡邊 洋子 |
| 基盤研究(B) 一般 | アジアの「体制移行国」における高等教育制度の変容に関する比較研究 | 南部 広孝 |
| 基盤研究(B) 一般 | 戦後日本の指導者の「ハビトゥス」形成と「界」の構造に関する実証的研究 | 稲垣 恭子 |
| 基盤研究(B) 一般 | 戦後東アジア諸地域における教育の比較史的分析―冷戦と植民地主義に着目して― | 駒込 武 |
| 基盤研究(B) 一般 | 21世紀型コンピテンシー育成のためのカリキュラムと評価の開発 | 矢野 智司 |
| 基盤研究(C) 一般 | 共感の個人差を形成する文化・心理・生物学的要因に関する認知科学的研究 | 野村 理朗 |
| 基盤研究(C) 一般 | ケアとスピリチュアリティの教育人間学的解明-女性宗教者への聞き取り調査を中心に | 西平 直 |
| 基盤研究(C) 一般 | 学習アーキテクチャとしての「記憶空間」の形成原理および問題改善の研究 | 山名 淳 |
| 基盤研究(C) 一般 | トランスナショナル高等教育と多国籍大学の展開に関する国際比較研究 | 杉本 均 |
| 基盤研究(C) 一般 | <レジリアントな個>の育成とアメリカ実践哲学：哲学と教育のクロスカレント研究 | 齋藤 直子 |
| 基盤研究(C) 一般 | 教師の熟達とキャリア形成に関する日独比較研究　―教師力としての教育的タクトを軸に | 鈴木 晶子 |
| 基盤研究(C) 一般 | タイミング制御が支える音韻的作動記憶と長期音韻知識の相互作用 | 齊藤 智 |
| 基盤研究(C) 一般 | 思考力・判断力・表現力育成のための長期的ルーブリックの開発 | 田中 耕治 |
| 挑戦的萌芽研究 | 「夢の構造分析」に関する発達的・比較文化的・心理臨床的研究 | 田中 康裕 |
| 挑戦的萌芽研究 | 学校改善に向けた「往還型」質的測定手法の開発的研究 | 服部 憲児 |
| 挑戦的萌芽研究 | 文化装置としての「師弟関係」に関する歴史社会学的研究 | 稲垣 恭子 |
| 挑戦的萌芽研究 | 自閉症スペクトラム障害をもつ青年および児童に対する日常生活スキル支援の研究 | 米田 英嗣 |
| 挑戦的萌芽研究 | 専門職教育者のIPE（異業種連携教育）基盤型研修プログラムの実践開発研究 | 渡邊 洋子 |
| 挑戦的萌芽研究 | 近代日本における流言効果のメディア史的研究 | 佐藤 卓己 |
| 挑戦的萌芽研究 | 批判的評価能力と高次の心の理論および認知コストとの関連 | マナロ エマニュエル |
| 若手研究(B) | 高等学校における教育資源配分の効率性および多元的な教育資源調達手法の検討 | 江上 直樹 |
| 若手研究(B) | ナショナリズムと「文明的」自己像形成をめぐる現象の比較・歴史社会学的考察 | 竹内 里欧 |
| 若手研究(B) | パーソナリティ特性の発達と健康の変化を統合的に理解するための縦断調査研究 | 高橋 雄介 |
| 若手研究(B) | 高次の学力を育成する「教科する」授業の開発研究 | 石井 英真 |

## ハラスメント防止に関する研修会

本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高めハラスメントの防止を図ること、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、毎年、研修会を開催しています。

平成26年度は、平成27年2月5日（木）に開催し、株式会社ウイメンズカウンセリング京都代表　井上摩耶子氏による講演が第1会議室であり、教員、事務職員の約30名程度の参加を得て、意識を高める機会となりました。

# 諸報

## 新任教員・事務職員紹介

**山田 剛史**
准教授

学生の学びと成長を促す教育・学習環境の創出と評価に関する研究・開発・実践を行っています。よろしくお願いいたします。

所 属 高等教育開発論講座
専 門 高等教育, 青年心理学

**橋本 敦史**
助教

情報基盤の運営・管理のみならず, 研究の面でも情報技術を利用した貢献ができるように頑張りたいと思います.

所 属 教育学研究科(情報関連)
専 門 画像処理, パターン認識, HCI

**李 芝映**
助教

京都でもう一度研究に専念できる機会をえてうれしく思っております。懐かしくも新しい環境で教育にも精進するようにがんばります。

所 属 教育学講座
専 門 教育史／思想史

**ユ リラ**
助教

4月に犬山の霊長類研究所より赴任してまいりました。助教としてお世話になります。進化と発達の観点から行動研究に挑戦していきたいと思います。

所 属 教育方法学講座
専 門 比較認知科学

**佐伯 恵里奈**
助教

4月から着任いたしました。よりよい教育環境を提供できるよう努めるとともに、研究活動に励んで参ります。

所 属 教育認知心理学講座
専 門 認知心理学

**福井 佑介**
助教

4月から助教としてお世話になっております。恵まれた環境を活かして研究に取り組むとともに、教育にも尽力いたします。

所 属 生涯教育学講座
専 門 図書館情報学

**時岡 良太**
特定助教

4月に着任いたしました。まだまだ未熟者ですが、皆様のお役に立てるよう精一杯努力いたします。どうぞよろしくお願いします。

所 属 附属臨床教育実践研究センター
専 門 心理臨床学

4月から教務掛でお世話になっております。不慣れなことばかりでご迷惑をおかけするかと思いますがよろしくお願いいたします。

所属掛 教務掛

4月から図書掛でお世話になっております。図書のご利用で何かお手伝いできることがありましたら、どうぞお申しつけ下さい。よろしくお願い申し上げます。

所属掛 図書掛

### 編集後記

『ニューズレター』第30号をお届けします。新しい生命の息吹を感じ、新しい出会いの予感に胸膨らむ春。新入生を迎えたキャンパスは、そうしたワクワク感にあふれています。ガイダンスでも目を輝かせて説明に聞き入る新入生たち。大学生活に慣れることで段々と落ち着いていくのは自然な流れとも思いますが、彼らの希望や期待を裏切らない授業や学びの場を提供していく努力を忘れてはいけないなとも思います。「高大接続」が声高に叫ばれていますが、その本質はそういう部分にあるのでしょう。「さすが大学は違う」と学生たちが思えるような授業ができているかとわが身を振り返り、自分の未熟さを思ったり、春のキャンパスでそんなことをつらつらと考えました。(TI)


**京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会**

委員長　楠見　孝　教授（教育認知心理学講座）
委　員　子安　増生　教授（教育学研究科長・教育学部長）
委　員　渡邊　洋子　准教授（生涯教育学講座）
委　員　石井　英真　准教授（教育方法学講座）
委　員　田中　孝二　事務長
委　員　古屋　比奈　総務掛長
委　員　辻　幸代　教務掛長

**事務担当**
教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075(753)3000
**ホームページ**
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp